



1886年『雪の道』

開館10周年記念企画展

支えられて生きている

—星野富弘と浦上秀樹作品展—

2016年11/15(火)～2017年2/12(日)

休館日：第2・4月曜日（祝日の場合は翌日火曜日）及び年末年始（12/29～1/3）

開館時間：9:00～17:00

入館料：大人500円 小中学生300円 幼児無料
※20名以上の団体、JAF会員証・障がい者手帳等お持ちの方割引有り

会場：芦北町立星野富弘美術館
〒869-5563熊本県葦北郡芦北町大字湯浦1439-2
Tel&Fax:0966-86-1600

星野富弘美術館

開館10周年記念企画展（第四回）

支えられて生きている

—星野富弘と浦上秀樹作品展—

頸髄損傷による呼吸困難を克服するまでの間、横たわる星野の体には、口には流動食用の管、のどには人工呼吸用の管、腕と脚には点滴用の管が差し込まれ、頭部には牽引用の重り、下半身には導尿の管が取り付けられ、人工呼吸器の使用により声も出せず、体の不自由のなか、頷くこともできず、自分の意思すら人に伝えることができない状態でした。他人にわかってもらえない、何もできない、何一つ自分でできることがなくなってしまっていました。星野は自らの無力さを痛感しますが、必死に励まし回復を祈る周りの存在、その支えに気づきます。

私を生かしているもの一、それは私自身ではなく、私を生んでくれた父、母であり、一緒に育った姉弟であり、友人であり、同僚の先生たちであり、医師であり、人工呼吸器であり、千羽鶴を折って回復を祈っている生徒たちであった。（新版『愛、深き淵より。』より）

わたしたちは、たくさんの人との、同じ大きな輪のつながりのなかで支えられて生きています。それは、日常のなかでふと気づくこともあれば、過去を思い返すなかで気づかされることもあります。本展では、いまを立ちどまり、ときには来し方を回想しながら、時に足跡を刻むあたたくもやわらかな星野富弘の世界を紹介します。

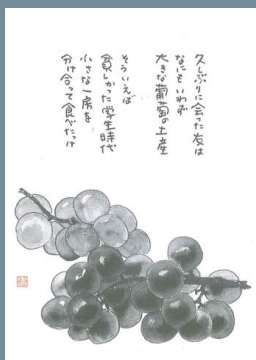
また、併せて、漢字のなかにもう一つ意味を持たせた新たなアート作品『こころMoji』を創作する、浦上秀樹の作品を紹介します。筋肉が徐々に減少していく進行性の病気を患い、体のほとんどの部分を動かさない状態ながらも、今をたのしみ、自分のなりたい姿、やりたいことを思い描き、積極的に生きる浦上秀樹の『こころMoji』アート作品10点を展示します。



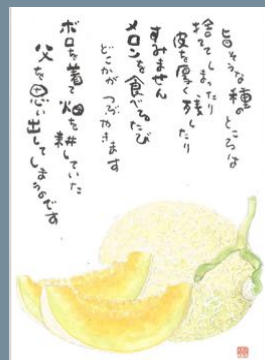
星野 富弘（ほしのとみひろ）

1946年群馬県勢多郡東村（現みどり市東町）生まれ。群馬大学卒業後、中学校の体育教諭になるも、クラブ活動（器械体操）の指導中、模範演技で空中回転したとき誤って頭部より転落。頸髄を損傷。首から下の自由を失う。入院中、口に筆をくわえて文や絵を描きはじめる。前橋で最初の作品展を開く。退院後、雑誌や新聞に詩画作品やエッセイの連載を始める。

1982年高崎で初の「花の詩画展」を開催以降、全国各地、また海外でも開催され、現在も続いている。1991年群馬県勢多郡東村に村立富弘美術館（現みどり市立「富弘美術館」）開館。現在も詩画やエッセイの創作活動を継続中。



「ぶどう」



「メロン」



「背中 (ユキノシタ)」



浦上 秀樹（うらかみ ひでき）

1973年埼玉県上尾市生まれ。21歳の時、筋肉が徐々に減少していく進行性の病気を発症。体のすべての感覚、動かしたいと思う意思はあるものの、腕や足などを動かす筋肉を必要とする部分をほとんど動かさない状態となる。2010年口に筆をくわえて「こころMoji

（漢字のなかにもう一つ意味をもたせたアート作品）」を始める。2013年カナダ・バンクーバー桜祭出展。全国各地で個展を開く。「ひと文字のキセキ」出版。現在も作品は進化を続けており、水彩による彩色作品にも取り組んでいる。



「訪〜どういきるか〜」



「福〜ふつうのこと〜」



交通案内

●電車の場合

熊本▶新八代または八代▶湯浦／約1時間40分

※R鹿児島本線及び肥薩おれんじ鉄道

新水俣▶湯浦／約15分

※肥薩おれんじ鉄道

湯浦▶美術館（徒歩）／約10分

※湯浦駅から美術館までは、案内看板を設置しています。

●お車の場合

熊本市▶美術館／約1時間30分

水俣市▶美術館／約30分

人吉市▶美術館／約55分

芦北▶美術館／約10分

芦北町立

星野富弘美術館

〒869-5563

熊本県葦北郡芦北町大字湯浦1439-2

Tel./Fax.0966-86-1600

URL.<http://www.hoshino-museum.com>